

目的： 住宅選択行動の一方の担い手である男性の住意識を把握するとともに住宅形式志向と生活姿勢、性格的要因との関わりを探る。

方法： 住宅に対する考え方、認識を把握するための「住意識に関する調査」、並びに「YG性格検査」を4年制大学に在学する2～4回生（建築学系を除く）を対象に実施した。有効票は、男子学生231人、女子学生70人で、調査期間は1993年12月から1994年1月にかけてである。

結果： ①中高層集合形式に対して、7割弱が多少なりとも居住の可能性を示し、残り3割が拒否層である。 ②中高層集合形式に住まうことに対する態度には、同住宅形式に対して、現状の生活を打破しうる受け皿としての可能性への期待や、自分なりの生活を展開しうる空間としての認識が存在する。 ③中高層集合形式への居住志向は、自らを個性的、進歩的であると自己評価する者に強く、同住宅形式に住まうことイコール日常生活における活動性の一つの現れと捉えがちな面が見受けられた。個人生活を重視することと、住宅の集合、人の集住という状況とが相容れない関係に展開するかもしれない危険性が、十分な理解を伴わない表面的な中高層集合住宅への居住志向には含まれている。